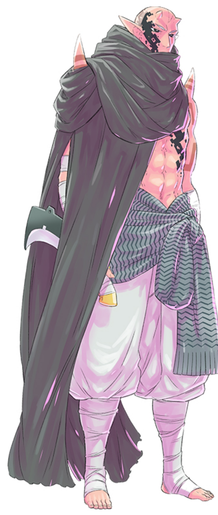
# 4.襲撃



<ゼオルラの首>が見つかった。

全く偶然のことだった。<首>の現在の依り代はネヴィムというオーガの青年。かつてのトーラの同僚であり、数年前に JB 一味に壊滅させられた暗殺組織の残党の一人である。

トーラは JB 一味に加わって以来、組織壊滅と同時に散り散りになったかつての仲間を更生させることを冒険の第二の目的にしていた。すでに数人を捕らえ、JB のつてを頼って療養させている。回復の早かった者の中には、その腕を買われて冒険者になった者もいた。

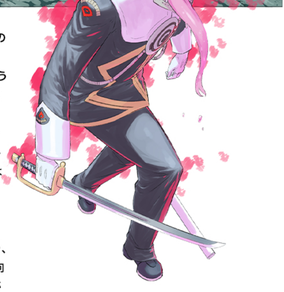
トーラが所属していた組織は、何かしら古い宗教に由来のある、由緒正しい暗殺術を今に伝えるものであったらしいが、それ自体は<首>とは関係はない。ただ単に JB が受けたクエストの途中で敵対し、その在り様―子供をさらって暗殺者として育て、刺客派遣業が営まれ、大きくなった子供が次の子供をさらって組織が存続していく不毛―が JB の逆鱗に触れ、徹底的に壊滅させられたというだけの関わりである。
トーラも物心つく前に組織に誘拐され、親の顔も分からずに、暗殺術だけを仕込まれて育てられた。組織から解放されたのちは、その素性を周りに哀れまれたりもしたが、本人はピンと来なかった。組織の育成プログラムは非常に優秀で、そういうことを悲しいと思わないように教育されていたからである。
むしろ困ったのは、彼女に<指令(コマンド)>を入力してくれる相手がいなくなってしまったことだった。これも組織のプログラムで、若い暗殺者は上役の<指令(コマンド)>を遵守し、それ以外の行動は一切望まないように教育されていた。若くして優秀な暗殺者であった彼女は、大概のことには冷静に対処できたが、<指令(コマンド)>が入力されない状況というのは想定になく、混乱して息をするのも難しくなり、思わず目の前にいた JB に<指令(コマンド)>をくれとすがった（その時の JB の何とも言えない表情はなぜか今でも忘れられない）。しばらく困った末に JB が出した<指令(コマンド)>は「指令がなくても自分がやりたいことを自分で決められるようになれ」というものだった。それ以来彼女の冒険の第一の目的は「本当にやりたい目的を見つけること」である。この指令はいまだに完了していないが、最近は何だか世の中の色んな物事にふわふわと惹きつけられている自分を発見することもあって、指令達成の糸口が見えているような、いないような・・・。

さて、ネヴィムである。
今まで<ゼオルラの首>が JB の捜索網にかからなかったのは、そもそも<首>無しでも騒動を起こしそうな者が捜索の対象になっていなかったからであった。トーラが昔の仲間を探す中で、たまたまそういう紋様を持った暗殺者の情報が入ってきたのである。
ネヴィムは当時の組織内でトーラに準ずる使い手ではあったが、今の JB 一味にかかれば確保は難しくないはずである。そこでむしろ泳がせて、<悪夢龍レムナス>の陰謀を暴き、あわよくばこちらから敵の拠点を襲撃して壊滅させる計画が立てられ、ソウラたちにも声がかけられた。
魔博士たちにも顔が割れていない腕利きの冒険者にも協力してもらって、ネヴィムの犯行を防ぎ、逃走する彼を尾行して、ついにカルデア山道のはずれの洞窟内にある、魔博士の研究所を発見する。

その研究所を探索する中で分かったことだが、<ゼオルラの首>とは、現実世界における存在が不安定な悪夢龍レムナスの「仮面(ペルソナ)」の活動を補助するために、魔博士たちが作った試作品の一つであった。自我というにはあまりに不安定な、怨念遂行のための機構そのものともいうべき仮面の本能を、宿主の知性によって補完する。あるいは、一定のパイアスを持って歪められた宿主の自我が、レムナスの妄執を叶えるための手駒として機能するようになる、という仕組みである。その時の目的によって様々な宿主を使い替えたりもするし、宿主に危機が迫った時は、他の者に乗り移ることもできた。これらの機能の初期の試験が、かつてブランクたちが遭遇した<ゼオルラの首>の一連の事件だった。

今でも本来の目的には関係のない、レムナスの個人的な気まぐれや、憂さ晴らしのためにお忍びで使われることがあり、様々な後ろ暗い仕事をする者の間を渡り歩いた末に、今のネヴィムにたどり着いたようだった。もとより自我の薄いネヴィムは、レムナスの仮面にとっては扱いやすい宿主だったことだろう。

そう考え至ったトーラは、本当に珍しく苛立ちを覚えた。背後から忍び寄る気配に、ネヴィムが得物の柄に手をかけた瞬間には、トーラのナイフが彼の肘を浅く切り裂いていた。皮一枚の傷であったが、彼女の秘毒は直ちにネヴィムの全身を侵し、彼は泡を吹いて倒れ、やがて呼吸が止まった。
トーラはその場を飛びのいた。<首>の乗り移りを防ぐためである。やがてネヴィムの体から黒い靄が立ち上り。その中に浮かび上がった丸い目がトーラの方を見つめ、真っ赤な口がにいと歪むと、煤が飛び散るようにふわりと消えてしまった。



しばらくして、ネヴィムが息を吹き返した。このために特別に調合した、相手を一時的に仮死状態にする毒である。JB の目論見としてはもう少し泳がせる予定だったが、ついカっとなってやってしまった。反省はしている。呆然とトーラを見つめるネヴィムに、久しぶり、と声をかける彼女の顔は、ほんの少し笑っていたかもしれない。ネヴィムが心を取り戻すために彼女はこれからしばらく骨を折ることになるが、それはまた別の物語である。

突如、ネヴィムの背後の壁に無数の光条が走り、次の瞬間微塵の破片となって炸裂した。壁の向こうから姿を現したのは献義体のシジマ。穴が開いた壁の奥には、驚いた顔の他の献義体や、魔博士たちの姿も見える。偶然にも、彼らが会合を行っていたタイミングだったらしい。
獣のように腰を落とし、顎に沿ってがばりと開いた第二の口から長い舌を垂らすシジマは、いつもの冷静な姿とは明らかに様子が違う。その頬には黒い幾何学模様が浮かび上がっていた。